シネ倶楽部

父と少年の旅

「オルジャスの白い馬」

原題：Horse Thieves

2019年／日本・カザフスタン／カザフ語・ロシア語／81分
監督：竹葉リサ、エルラン・ヌルムハンベトフ
出演：森山未來、サマル・イェスリャーモワ、マディ・メナイダロフほか

父と名乗れないまま少年と旅する
©「オルジャスの白い馬」製作委員会

藤本透子
民博 人類文明誌研究部

日本とカザフスタンの合作映画

天山山脈のふもとに広がる草原を舞台に、ある事件をきっかけとして揺れ動く家族の姿を繊細に描き出した映画だ。日本とカザフスタンの双方から監督と俳優が参加し、全編にわたりカザフスタンで撮影された。

カザフ人監督のエルラン・ヌルムハンベトフは、みんぱく映画会で二〇一六年に上映した「くるみの木」（二〇一五年）では結婚をめぐる騒動を明るく描いたが、本作品では一転して家族の死と喪失感という深刻なテーマに向き合っている。中央アジア映画に憧れていた竹葉リサ監督からのオファーで、共同監督を務めたという。

また、みんぱくワールドシネマで上映した「トルパン」（二〇〇八年、セルゲイ・ドヴォルツェヴォイ監督）で、草原に咲くチューリップ（トルパン）のように可憐な娘を演じた女優サマル・イェスリャーモワが、本作品では俳優の森山未來と共演している。そして、オーディションで選ばれたカザフ人の少年、マディ・メナイダロフは森山未來と顔立ちが似ており、本作品中の複雑な親子関係を自然に演じきっている。

馬泥棒

幼いオルジャス少年が、両親や妹たちと暮らしているところから話は始まる。父はある日、二〇頭の馬を売りにバザールに出かける。一頭の美しい白馬だけは「オルジャスのものだから」と家に残してくれた。遠いバザールに連れていってもらえなかったオルジャスは、母の手伝いもそこそこに友達と遊びに行く。泉で泳ぐロシア人カップルをのぞき見したり、廃屋の壁に絵を描いたり、ケンケン遊びをしたり。――しかし、無邪気な暮らしは、その日の夜に突然終わりを告げる。雷雨のなかやってきた警察は、バザールに出かけた父が殺されたと母に告げた。馬泥棒の一味が、オルジャスの父とその仲間を殺して馬を奪ってしまったのだ。

馬の群れと牧夫（カザフスタン、2003年）

映画の舞台は一九九〇年代、ソ連から独立したばかりのカザフスタンが経済的に混乱していたころだ。それまで村の暮らしを支えていたソフホーズ（国営農場）は解散し、多くの人びとが失業した。家畜の世話や畑仕事に精を出して、どうにか暮らしていく日々が続いた。しかし、急速な市場経済化の波は人の心をも変え、家畜は市場で換金できて儲かるという感覚が浸透した。家畜泥棒が横行し、羊や山羊や牛よりも金銭的価値が高い馬が狙われた。実話をもとにした殺人事件の描写から、家族が受けた衝撃と悲しみが胸に迫る。

混沌のなかを生きていく少年

葬儀のまさにその日、喪失感に沈む家族のもとに、オルジャスが赤ん坊だったころに失踪した実父カイラートが突然あらわれる。オルジャスの母アイグリは、何年も失踪していたカイラートを簡単には赦せない。引っ越しを手伝うことになったカイラートは、自らを父と明かせないまま、ずっと会いたかった息子のオルジャスとともに草原を馬で行く。その引っ越しの旅の途中、野宿する焚き火のそばで、誰もいないバス停で、さびれた食堂で、二人のあいだの微妙な距離感が描かれる。森山未來演じるカイラートが起伏に富んだ草原を馬に乗って疾走していく場面も見どころだが、カイラートがカザフ語でとつとつと話し、オルジャスが徐々に打ち解けていく場面も印象的だ。

少年が父と信じる男性の腕時計を馬泥棒から取り戻すため、実父カイラートが奮闘するところは切ない。養父を失った少年と、実父の関係は複雑だ。引っ越しが終わって去っていくカイラートを見つめるオルジャスのまなざしに、混沌とした世界を生き抜いていくことの寂しさと、未来へのほのかな希望を感じる。わたしはカザフスタンの草原の村に二年滞在したとき、父親を亡くした幼い少年の家に住まわせてもらっていたが、その少年の成長がこの映画の世界に重なって見えた。ささやかな日常のなかにあるドラマを描き、運命に翻弄されながら生きる人びとの内に秘めた思いを、静かに熱く語りかけてくるような作品だ。

村で暮らす少年と母　©「オルジャスの白い馬」製作委員会